

没後200年 “ロマン派の先駆者 ウェーバー”

プログラム

今年は、ドイツ・ロマン派の初期を代表する作曲家で、ロマン主義の道を切り開いた先駆者とも言われるウェーバーの没後200年にあたります。今日はウェーバーの名曲の数々をたっぷりとお聴きください。

カール・マリア・フォン・ウェーバーは1786年11月18日、ドイツ、リュベック近郊のオイティーンに生まれました。父が男爵の爵位を持つ貴族の家柄で、父の兄の三女コンスタンツェはモーツァルトと結婚しました。作曲家でもあった父はウェーバーをモーツァルトのような神童に育てることが夢でしたが、9歳の時に本格的な音楽教育を受け、隠されていた楽才が表れたウェーバーは、さらにウィーンで高名なゲオルク・ヨーゼフ・フォグナーにも師事して13歳でオペラの処女作を作曲、ピアニストとしても活躍しました。1804年フォグナーの推挙でブレスラウ歌劇場の楽長になりましたが、ウェーバーの理想主義や父の投機的な思惑などで敵を作り、約2年で辞任。その後はドイツ各地を転々としませんが、その間、作曲や文筆活動に力を注ぎました。ようやく1813年1月にプラハ歌劇場の指揮者という安定した地位を獲得、1816年11月30日まで続くプラハ時代にウェーバーは、著しく質的低下をきたしていた歌劇場を改善、復旧する大役を果たしました。1817年、ドレスデン歌劇場の指揮者に迎えられ、イタリア・オペラ主流の時代にドイツ・オペラ発展のために献身的に努力を払い、1821年6月に初演された「魔弾の射手」の大成功により、ドイツ国民オペラを確立しました。この頃から結核に冒され、医師から静養を命じられていたウェーバーは、1826年4月、イギリスのコヴェントガーデン歌劇場から委嘱されていた歌劇「オベロン」を無理を承知で自ら指揮し初演しますが、病状が悪化、6月5日、異郷のロンドンで帰らぬ人となりました。ウェーバーは「モーツァルトの再来」と呼ばれるほどの天才でしたが、「魔弾の射手」の他、一部の曲を除けば、決して演奏頻度の高い作曲家とは言えません。今日はウェーバーの魅力を再認識していただけたらと思います。 (中川)

カール・マリア・フォン・ウェーバー (1786~1826) :

クラリネット協奏曲第1番 短調 Op.73

アンドレアス・オッテンサマー (クラリネット)

マリス・ヤンソンス指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(2017.5.1 キプロス、パフォス城野外特設会場でのLive ~ヨーロッパ・コンサートから~)

舞踏への勧誘 Op.65 (ベルリオーズ編曲)

ハインツ・ワルベルク指揮NHK交響楽団

(1981.6.19 NHKホールでのLive)

ピアノ小協奏曲 短調 (コンツェルト・シュテュック) Op.79

クラウディオ・アラウ (ピアノ)

ホルスト・シュタイン指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(1982.3.18 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

*** 休憩 ***

カール・マリア・フォン・ウェーバー (1786~1826) :

歌劇 “魔弾の射手” 抜粋

① 序曲

② 第1幕 ワルツ

④ 第2幕 おあいご用 (エンヒェン)

⑥ 第3幕 狩人の合唱

③ 第1幕 森から森へ、草原を抜け (マックス)

⑤ 第2幕 アガーテの祈り (アガーテ)

⑦ 第3幕 ファイナーレ

オイゲン・ヨッフム指揮ベルリン・ドイツ・オペラ管弦楽団／ベルリン・ドイツ・オペラ合唱団

カタリーナ・リゲンツァ (アガーテ=ソプラノ) /カール・ヨゼフ・ヘリング (マックス=テノール)

エディット・マティス (エンヒェン=ソプラノ) /ゲルト・フェルトホフ (カスパル=バス)

(1970.4.11 日生劇場でのLive)

歌劇 “オイリアンテ” 序曲 Op.81

小澤征爾指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(1987.6.28 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

歌劇 “オベロン” 序曲

カール・ベーム指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

(1979.8.15 サルツブルク祝祭大劇場でのLive)

曲 目 解 説

ウェーバー：クラリネット協奏曲第1番へ短調Op.79

クラリネット協奏曲の歴史をたどってみると、作曲数も少なく、名曲はそれほど多くはありません。まず先に思い浮かぶのが、モーツァルトのイ長調の協奏曲ですが、その次に位置するのが、ウェーバーの作曲した3曲のクラリネット協奏曲です。その後、クラリネット協奏曲の名曲は20世紀になって、1928年にデンマークのカール・ニールセン、1949年にイギリスのジェラルド・フィンジ、同じ1949年にアメリカのアロン・コーブランドがそれぞれ魅力的なクラリネット協奏曲を作曲しました。ウェーバーは1811年ミュンヘンを訪れた時に名クラリネット奏者、ハインリッヒ・ベールマンと出会い、親交を結び、彼のために立続けに3曲のクラリネット協奏曲を作曲しました。最初のクラリネット小協奏曲が1811年4月5日に初演されると、これを聴いたバイエルン国王のマクシミリアン1世は大変感動し、ウェーバーに新たに2曲の協奏曲の作曲を依頼しました。ウェーバーはすぐに着手し、4月から5月にかけて第1番へ短調、7月に第2番変ホ長調が完成しました。第1番へ短調は1811年6月13日に、ミュンヘンにおいてベールマンの独奏、ウェーバーの指揮で初演されました。古典的な形式とロマン的な幻想が絶妙に調和された名曲です。★オーストリアの名手OTTENSBAUMER(1989～)と名指揮者マリス・ヤンソンス(1943～2019)共演による名演。
第1楽章 アレグロ 第2楽章 アダージョ・マ・ノン・トロツポ 第3楽章 ロンド、アレグレット

ウェーバー：“舞踏への勧誘” Op.65（ベルリオーズ編曲）

ウェーバーは1819年、33歳の時に妻のカロリーネのために、「舞踏への勧誘」という物語風のピアノ曲を作曲し捧げました。「紳士が淑女を舞踏会に誘う。女性はためらいながらも承諾して踊り出す。すると、楽しく華やかな舞踏会が繰り広げられ、やがて舞踏会が終わると、ふたりは名残惜しそうに別れていく」。序奏と後奏にふたりの会話が、主部に舞踏会のワルツとして描かれるという標題音楽の先駆けというだけでなく、素朴なワルツを詩的な表現形式に高めた作品として、歴史的にも重要な作品となっています。このピアノ曲は1821年に出版されましたが、1841年にフランスの大家ベルリオーズが、これを管弦楽用に編曲しました。ウェーバーを尊敬していたベルリオーズは1841年にパリ・オペラ座で「魔弾の射手」が上演された際、フランス・オペラ上演時に慣例となっていたバレエ音楽に「舞踏への勧誘」を編曲して挿入したのでした。今日ではピアノ曲より演奏頻度が高く、親しまれている名曲です。★ドイツの名指揮者ハインツ・フルベルク(1923～2004)がN響に客演した折の演奏。

ウェーバー：ピアノ小協奏曲へ短調（コンツェルト・シュテュック）Op.79

ウェーバーのピアノ協奏曲は、24歳の1810年に第1番を作曲、第2番は翌1811年に完成し、どちらも古典的なソナタ形式の中に劇的要素をバランスよく配したウェーバーの個性が表れた作品でした。さらに3番目のピアノ協奏曲は1815年に着想し、6年後の1821年に完成させますが、ウェーバーはこれを第3番とはせず、標題的協奏曲、コンツェルト・シュテュックとしました。十字軍遠征に加わった夫の帰還を待つ妻の不安と再会の喜びを描いていますが、完成したばかりの1821年6月18日の朝、ウェーバーは妻のカロリーネと弟子のベネディクトにこの筋書きを語りました。この日の夜には、歌劇「魔弾の射手」の初演が行なわれ、ウェーバーにとって記念すべき日となり、曲は1週間後の6月25日にベルリンで初演されました。4部からなる単一楽章形式で、劇音楽的要素とピアノの名技性が融合された名曲です。★チリのアラウ(1903～1991)とドイツのシュタイン(1928～2008)両巨匠共演ライブ。

ウェーバー：歌劇“魔弾の射手”

ウェーバーはすでに13歳の時に最初のオペラ「森の娘」を作曲（断片）しましたが、それから生涯にわたってドイツ・オペラ確立のために献身的な努力を重ねていきました。ウェーバーは1810年、24歳の頃にヨハン・アウグスト・アーペル著による「幽霊物語集」から「魔弾の射手」の素材を発見しました。最初友人に依頼した台本は意図したものではなかったため、作曲されませんでした。1817年ドレスデンで、知り合いのドイツの詩人、劇作家であるヨハン・フリードリッヒ・キントのもとで台本が完成しました。しかし作曲は、宮廷のための楽曲依頼などで多忙を極め進みませんでした。その間カロリーネとの結婚もあり、1820年5月、ようやく完成しました。翌1821年にウェーバーはベルリンに赴き、3月14日自作の歌劇「プレチオーザ」を初演して成功を収めると、「魔弾の射手」は17回の練習のあと、6月18日に新しい劇場「ノイエス・シヤウシュピールハウス」で、ウェーバーの指揮で初演、空前の大成功を収めました。「物語は30年戦争が終った1649年頃のボヘミアの森の中。愛する護林官の娘アゲーテと結婚するために射撃大会で優勝しなければならぬ猟師マックスは、不調に落ち入り、悪魔の誘惑で、「百発百中の魔弾」を手に入れる。しかし、7発中6発は命中するが、残りの1発は悪魔の思うままの所へ飛んでしまう。魔弾は「撃たないで！」と叫びながら現れたアゲーテを襲い、アゲーテはその場に倒れるが、身に付けていた聖なるバラに守られ助かる。マックスは追放の身となるが、不思議な隠者のおかげで、結局マックスは許される」。この作品はワーグナーに至るドイツ国民歌劇の道を切り開いた記念碑的名作として親しまれています。★ドイツの巨匠オイゲン・ヨッフム(1902～1987)が1970年大阪万博の年に行なった歴史的ライブ録音。

ウェーバー：歌劇“オイリアンテ” Op.81

ウェーバーが「魔弾の射手」の成功のあと、次に劇場から依頼されて作曲したのが、歌劇「オイリアンテ」です。1823年に完成、同年10月25日にウィーンのケルントナートーア劇場で初演されました。「伯爵夫人オイリアンテが伯爵との仲を裂こうとする邪魔者の悪事に会いながらも、最後には結ばれる」という物語で、今日、上演される機会はありませんが、序曲だけはしばしば演奏されています。★小澤征爾(1935～2024)とベルリン・フィルによる快演。

ウェーバー：歌劇“オベロン”

「魔弾の射手」はロンドンでも上演されて人気を集め、コヴェントガーデン歌劇場は新たなオペラをウェーバーに委嘱しました。歌劇「オベロン」は1825年1月に作曲を開始すると、翌1826年3月に完成、同年4月12日にロンドンのロイヤル・オペラ・ハウスでウェーバーの指揮により初演されました。この頃、結核に冒されていたウェーバーは、無理がたたって病状が悪化、2ヶ月後の6月5日、ロンドンで死去。「妖精界の夫婦喧嘩のために愛の試練にさらされた若い男女が、妖精バックスの働きで見事に結ばれる」というお伽話の世界が、見事な管弦楽によって幻想味豊かに描かれます。上演される機会には恵まれていませんが、序曲は盛んに演奏される名曲として親しまれています。★オーストリアの巨匠カール・ベーム(1894～1981)とウィーン・フィルによるサルツブルク音楽祭での名演奏。